

書 評

津曲敏郎. 『北のモノ・コト・ヒト—こ
とばと博物館の出会い』北海道大学出版
会, 2022年, 438p.

落合いずみ*

著者は言語学者だが本書は言語学の専門書ではなく、シベリア、サハリン、中国東北部に分布する北方諸言語、特にツングース語族とそれら言語を話す人たちの言語・文化的背景を自らの著作をつうじて概観する著作集である。著者は「私がかかわってきた言語学の分野も言語学プロパーの中心的な部分よりは、むしろ中心からちょっとずれた周辺的な部分、関連領域というか、文学とか歌とか民族文化とか、そういったことと言葉との関係に、より多くの目をむけてきた…」と述べる(pp. 370-371)。

本書は1 北方言語概説, 2 危機言語, 3 調査旅行記, 4 書評・紹介・序文, 5 北海道大学言語学研究室, 北海道大学総合博物館, 北海道立北方民族博物館連載巻頭言等エッセイ, 6 退職記念講演ほかを主題とした6章からなる。各章内において、または章をわたって重複した記述が散見されるという難点はあるが、北方の言語・文化に不慣れな読者にとっては読書内容の再復習という効果もある。著者が「今までどこかで書いたり話したりしてきたことですので、またあの話か、と思う方もあるかと思いますが、まあ、同じこ

とを繰り返すのは年寄りの特権」(p. 372)と述べているとおりでである。以下、各章を概観したうえで評者の所感を記す。

第1章では北方言語を概観するが重点はツングース語族(エウエンキー語, エウエン語, ソロン語, ネギダル語, ウデヘ語, オロチ語, ナーナイ語, オルチャ語, ウイルタ語, 満州語の10言語からなる)にある。アムール川流域を中心とした地域からシベリア、樺太に分布する消滅の危機に瀕した言語である。地理的に中国またはロシアに属している。これら言語の類型的特徴を述べたあとで、優勢言語の中国語またはロシア語の影響を受けた点を挙げている。またツングース文化にゆかりの深い語である「セイウチ」「チョウセンニンジン」「シャマン」についても考察している。

強い印象を受けたのは山でのチョウセンニンジン採りにおける特殊な言語の使用である。山ではウデヘ語ではなく中国語由来の表現を用いる。たとえばニンジンの場合は「Baŋcui! (棒槌)」(p. 97)と叫ぶ。また、これは朝鮮における記述だが、山で用いる隠語のうち6語が漢語、10語が満州語起源である。ウデヘ族にしても朝鮮族にしても獲物採りでは外来語由来の隠語を使う。それは北奥マタギの山言葉にアイヌ語由来のものが多いこと[金田一 2004: 240-247]を想起させ、聖域での命がけの行為では、普段使いの言葉が禁忌となるため外来語に置き換えた可能性が読み取れる。

第2章は危機言語の観点から北方少数言語を概観する。ツングース諸語についてい

* 帯広畜産大学人間科学研究部門

ば、ロシアまたは中国という大国のもと、生活の近代化に曝され、使用言語もロシア語・中国語に置き換わりつつある。これら北方少数民族言語が失われてしまう前に、それらの言語を調査し、記録し、保存することが急務であると説く。作業はまず無文字の言語を文字化することから始まるが、このような活動には言語学者のほかに、訓練を受けた少数民族自身が自ら関わるようになってきた。

しかし危機言語の気運は衰えたといわなければならない。危機言語気運の高まりは1991年のLSA Endangered Language Symposiumに端を発し、1994年に日本言語学会「危機言語」小委員会が発足したが、16年後の2020年に解散した。言語学という学問において危機言語は、生成文法という主流の隆盛が過ぎたあとで、新たな主流を探して辿り着いたテーマのように感じられる。それが世界各地において少数言語が優勢言語に飲み込まれて失われていくという時勢と合致したのである。危機言語の隆盛が過ぎた今、言語学は何を次の主流としていくのだろうか。津曲氏が危惧するように、「言語学は過度に専門化し細分化されて、総合への意欲に欠け」「オタク化」(p. 153)していくのだろうか。これとは逆に、著者が主張するように「一つの専門に凝り固まらない、総合的視野と柔軟な適応力をもった、バランスの取れた言語学者の育成」(p. 152)が求められるのではないか。そして著者が専門家に対して苦言を呈しているように「研究者・学生を含めた、いわば新参者を狭い縄張り意識で排除しないほしい」(p. 149)。

第3章では著者自らが出向いたフィールド調査地点を紹介する。まず中国国内に位置するビールト・ガチャという鄂温克族(ソロン語またはエウエンキー語の話者)の村、内蒙古自治区に位置するオールドス地帯、中口国境に位置するヘジェン(ナーナイ)族の集落、アムール川流域のナーナイ族の集落、ビキン川流域のウデヘ族の集落である。このほかにデルス・ウザーラを伴ったロシア人アルセーニエフの踏査についても紹介している。

著者が最も長く深く関わった言語はウデヘ語である。カンチュガ氏という最良の調査協力者との出会いがあった。自らの母語であるウデヘ語に愛着をもち、消滅の危機に瀕した言語を調査・記録する意義を理解し、その言語を説明する能力を備えた稀有な人物である。著者はカンチュガ氏と共著で『ウデヘ語自伝テキスト』『ウデへの二つの昔話』等を出版した。著者とカンチュガ氏の関係は言語学者・少数言語話者の組み合わせとして最良であったろう。

第4章は著者による書評・紹介・序文などを収集する。まず北方諸言語の入門書として『月刊言語』の特集「北方の諸言語」(1983年11月号)と「北方研究の現在」(1992年7月号)を推薦している。書評などとして以下が収められる。ロバート・アウステリッツ著『ギリヤークの昔話』(1992)、池上二良著『ウイльта語辞典』(1997)、『満州語研究』(1999)、『北方言語叢考』(2004)、呉人惠著『危機言語を救え!—ツンドラで滅びゆく言語と向き合う』(2003)、『コリヤーク言語民族誌』(2009)、佐々木史郎著『シベリアで生

命の暖かさを感じる』(2015), 吉岡乾著『な
くなりそうな世界のことば』(2017), 小坂
洋右著『アイヌ, 日本人, その世界』(2019),
黒田信一郎著『ギリヤークの社会構造』, 光
村図書出版『飛ぶ教室』第3号(2005秋
「特集 神沢利子の世界」), 司馬遼太郎著『街
道をゆく 38—オホーツク海道』(2005), 津
曲敏郎訳『増補改訳 ビキン川のほとりで—
沿海州ウデヘ人の少年時代』(2014).

書評を著した書籍の内容は言語学に限られ
ず, 民族誌, 文化人類学, 社会学など多岐に
及ぶ。これらの中で特筆すべきは, 池上二良
氏である。池上氏の著作については3本の
書評を著した。そのことに池上氏の研究に
対する敬意が読み取れる。その書評中に池上
氏の言語研究に対する見解と津曲氏の意見が
述べられている箇所では, 評者が共感するもの
を引用する。「諸言語間に見られる構造の一致
や類似の全体的な解明には『言語類型論』の
みならず, 比較言語学(すなわち親縁関係)
や地域言語学(言語接触)の観点から考察す
ることが必要であると念を押している。言語
類型論が言語学の一つの潮流となりつつある
中で, 歴史的経緯という実質を離れた『類
型』が一人歩きすることにいち早く警鐘を鳴
らしたものであろう。」(p. 268)

第5章は津曲氏の北海道大学言語学研究
室時代, 北海道大学総合博物館館長時代, 北
海道立北方民族博物館館長時代における回想
録等を収める。ちなみに本書の題目『北のモ
ノ・コト・ヒト—ことばと博物館の出会い』
は, 北方民族博物館友の会季刊誌 *Arctic
Circle* に収められた館長巻頭言「北のモノ・

コト・ヒト」に基づくものである。

本章に登場するナーナイ族のデルス・ウ
ザーラ氏とウデヘ族のヤコフ・トロフィーモ
ヴィッチ氏を取り上げたい。ウザーラ氏は黒
澤明『デルス・ウザーラ』(日口合作映画)
の主人公である。天然痘で親族を失った孤独
な生い立ちの主人公はロシア人アルセーニエ
フに出会い, 彼の踏査隊に協力するようにな
る。踏査中のある日, 彼等はアムール虎に出
くわした。神聖な動物として撃つてはいいな
いことになっている虎をデルスは撃ってしま
い, 自責の念にかられる。その後, 視力の衰
えに絶望するようになる。アルセーニエフは
視力が悪くても使える高性能の銃を彼に贈っ
たが, その高級品携行があだとなり殺害され
る。著者によるとトロフィーモヴィッチ氏は
デルス・ウザーラを彷彿とさせる人物だとい
う。彼は村への参観者を先導する仕事をして
いた。ある日, 氷が割れて水没しかかったス
ノーモービルを何とか引き上げたが, その無
理がたたって亡くなってしまった。2人とも
高性能の銃にスノーモービルという物質文化
の受容が彼らの死の要因となったといえる。
少数民族の言語文化の多様性を今, 研究・記
録しなければ, 人類の貴重な財産が永遠に失
われてしまうという危機感に研究者がかられ
るだろうことは理解できる。しかし近代化に
浴した研究者が少数民族に関わるというこ
とは, 少数民族側に何らかの変化を強要す
ることでもあるということ, その変化が必ずしも
良い方向に働かないことを深く心にとめてお
かなければならない。

第6章は「コトノハ考」と退職記念講演

を収録する。講演録からウイлта語のアクセントに関する考察を取り上げたい。著者は樺太から釧路に移住したウイлта族の北川源太郎氏についてウイлта語のフィールド言語調査をおこない、その成果としてウイлта語のアクセント位置が予測できるようになった。後ろから 2 番目のモーラにアクセント核があり、そこが母音や子音だけからなる場合はひとつ前のモーラにアクセント核が移るという規則を見出したのだが、この考察は師匠の池上氏から評価されなかったと述べる。本書は再評価のきっかけを多くの言語学者に与えるだろう。

最後に、ツングース諸語とそれらの言語を話す人々についての入門書として本書を手にとってほしい。そして本書集録の書評などで紹介された書籍などへと、さらに北方諸民族とその言語・文化へと興味は広がっていくことだろう。

引用文献

金田一京助. 2004. 『古代蝦夷とアイヌ』平凡社.

松田素二・フランシス・B・ニャムンジョ・太田 至編. 『アフリカ潜在力が世界を変える—オルタナティブな地球社会のために』京都大学学術出版会, 2022 年, 452 p.

阿部利洋*

本書は、5 年 2 期にわたる大型科研プロ

* 大谷大学社会学部

ジェクト（「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」2011–2016 年, 『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服—人類の未来を展望する総合的地域研究』2016–2020 年）の最後に出版された成果論集である。日本とアフリカから 100 名を超える研究者が集結した共同研究の成果としては、既に和文 5 巻組 [太田 2016], 英文 7 巻組 [Matsuda 2021] のシリーズ論集が出版されており、そこでの多様な各論を踏まえた本書は「プロジェクトの創設から中核となって共同作業を推進してきたコア・メンバーと、それを継承して未来につながり世代のメンバーによって、その議論を発展させた」ものと位置づけられている (p. 27).

長期にわたり多数の研究者が関与する共同研究では、アフリカ潜在力というキーワードがあらかじめ定義されることはなく、「紛争解決と共生実現、環境保全や格差是正といった、今日、地球規模で『問題化』しているイシューに対して、アフリカ社会が他社会との交流や葛藤をとおして創造してきた対処能力を、人びとの生活の現場に注目しつつ取り出し、人類社会に共通の資産としよう」(p. 14) という緩やかな共通認識のもとで進められた。

ここには、①「アフリカを含む現代世界が有効活用できる知識・情報は何かという問いに対するアフリカ発の答えを提示する」志向とともに、②「異質な存在が対話をとおして何かを創造する機会を触発する」ねらいも込められている。エドワード・キルミラが